



鴻文会会報

第 8 号

発行・鴻文会

753 山口市吉田1677-1

山口大学人文学部内

電話(0839)22-6111

(内線) 808

郵便振替口座

下関0-15902

時代とともに伸びゆく鴻文会

社会学・文学部第一回・昭和二十八年卒

竹 田 守 恵

わが国では一泊以上の旅行をする人が年間六千五百万人いるといわれている。そのうちの三分の一は帰省旅行者である。帰省者はふるさとにいる親へのあいさつや墓参を目的としていた。ふるさとは自然があり情緒がある。都会に自然が失われ、人情の薄くなった現在、親は子供にせがまれて交通が極度に混雑する中帰省をする。子供はふるさとの自然にふれ、温さに接してそれを土産話として街に帰って行く。親達の墓参は二義的となってしまっている。多くの学校の同窓会もお盆や正月の帰省した仲間を待つ集りが開かれる。戦後の新制大学の多くは旧制の学校という枠のなかで誕生した。山口大学もその例にもれず、一時期経済学部、教育学部を中心とした地域に総合大学の構想がもたれたが、時代の流れは速く大きかった。吉田の地に今までの枠を脱して、新しい流を質量とも受容したキャンパスが形成されるにいたった。

旧制高校に代表される涙を流しながら校歌や寮歌を歌う姿を今の学生は到底理解し得ないであろう。文化の多面化、組織の巨大化のなかに生きる若者もまた大きく変容をしてき、教育の場も変ってきている。若者は学生という身分に帰属する場があるからこそ安心して逸脱できるという奇妙な心理がある。学校は身分証明という錨をおろすところと考えている。むかしの学校にはコミュニティに近く、そこで学ぶ者をも含めて成員をまるごと抱え込んでしまうところがあった。いわばふるさとでもあった。

高松市に四国村という民俗博物館がある。四国に残っていた古い民家がある考えのもとに移築したものである。その理事の吉田さんは、ガラスのケースに入れて陳列して見にくいなさいといっても人はこない。見る人に楽しみを与えながら学ばせるといふ人を引きつける企画がなければ、人は集まらないといわれている。

鴻文会も結成八年を迎え、今年十年を記念する行事も企画されている。また、新会員を多く迎えた。大学が新しい波を巧みに取り入れ成長拡充してきたように、鴻文会も会員の英知を集めて多様な文化を呑み込み会員とともに常に前進をして行かねばならない。若き日に夢を育んでくれたキャンパスは帰省する会員を温く迎えてくれることと思う。

人文学部創立十周年を祝して

鴻文会会長 和田 敏 英

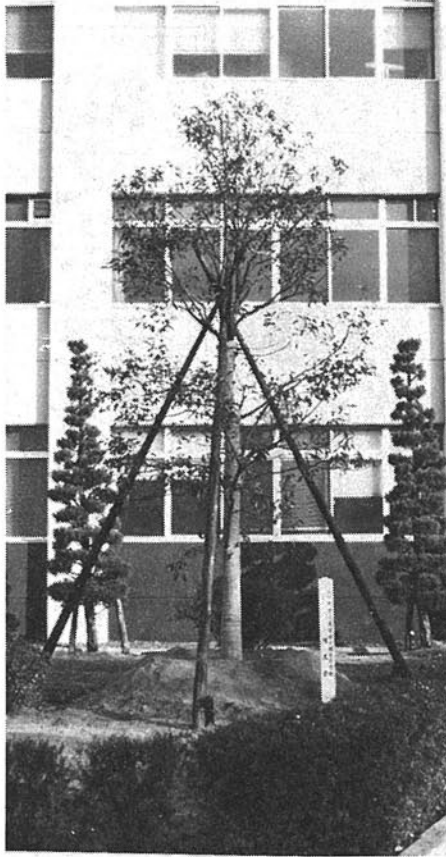
去る六月十六日をもって、昭和五十三年発足の人文学部は十周年を迎えました。この間、大学院修士課程修了者十六名を含め、千六百六十余名の卒業生が巣立ち、旧文学部文学科の卒業生を加えれば、その数は約三千名にも達しようとしていきます。

鴻文会では、この節目に当たり、次のような二つの記念行事をおこなうことにいたしました。一つは、すでにご案内の通り、社会の第一線で活躍中の卒業生お二人（柴田俊造、松浦亮氏）を講師に招き、国際化時代における留学生と日本語教育、大学と社会をテーマに示唆に富む講演を聞くことができました。五月二十八日（土）に行われたこの二つの講演の要旨は本会報に収録されております。閉会後講師を囲んで懇親の会をもちました。

もう一つは、学部の前庭にクスノキ二本の植樹です。十一月三十日無事植栽いたしました。樹高四・五メートル、側に「山口大学人文学部十周年記念樹」と記した白い標柱を建てております。クスノキという言葉の響きにもあやかっ、これがスクスクと育ち、いつまでも緑蔭緑想をはぐくむ香り高い大樹となつてくれることを期待しております。

人文学部の慶事に際し、鴻文会記念行事のご報告までに。

一九八八年 晩秋



上記人文学部創立十周年記念講演会の要旨を掲載致します。

大学と社会

中国新聞販売局次長

松浦 亮

三十年前に当時の文学部英米文学科を卒業し、地方新聞で働いてきた平均的なOBとして、その足跡を振り返ってみたい。いま国際化、情報化が進む中で、大学生活をどう送り、就職という関門をくぐって社会にどう対応していくのか、在学のみならず少くとも参考になればと思う。

学生諸君の会社訪問や面接の時に感じることは、クラブ活動とアルバイト経験については、誰もが生き生きと語るのに、大学の講義や自分の専攻については、意外に話題が膨らまない点である。「文科出は実学を身につけていない」と言われた時、君には何があるかを自問しろ」と常々言われた恩師を思い出す。卒業して二、三年後の同窓会で、ある先生は「この中に英語を続けている者が何人いるか」とも尋ねられた。

地方紙記者としてのスタートは、警察回りから地方支局勤務を、ただ体力だけでこなす毎日だった。しかし、英文出身というレッテルに引つ張られ、英語を試される取材現場にさらされた。恥をかって引つ込むか、大学で遊んだ不明を反省し遅まきながら実学への努力を重ねるかで、企業人としての道は分かれる。

広島の本社、東京支社時代を通じ数度にわたる海外取材、さらに厚爆・平和問題を追う中国新聞のニューヨーク特派員というチャンスを活かしたのは、レットルに引つ張られた

お蔭とわが母校に深く感謝している。持続する志という面からは、企業の中にも教養課程と専門課程はあるように思う。私の場合、警察回りの研修期間中にたまたま体験した被爆二世の自殺事件取材が、後にヒロシマ記者として歩むきっかけとなった。こだわりの持つことの意味を考えて頂きたい。

個人にゆるやかな変革と蓄積を促す大学に比べ、今日の企業は自ら激変する中で社員に急激な対応を求める。新人といえども例外ではなく、情報化・国際化時代を生き延びる戦士として企業一色に染め上げようとする。その画一化傾向に身を置きながら、他人と一味違った資質を発揮するエネルギーを持ち合わせていけるだろうか。

一九八〇年から八四年までのアメリカ滞在で、私はあの広大な国にかつて機械化もたらした規格化、量産化という画一化の中で、自分自身を開発し他人とは違った資質を発揮しようとする多くの人々に触れた。画一化傾向と十分な個性の発揮、この二つの要素はアメリカを考える場合に忘れてはならない要素だとよく言われる。

私自身は、国連を中心とした平和問題、ニューヨークでの経済問題取材に明け暮れる日本人特派員としての務めを果たすと同時に、中国新聞が毎年八月に招請しているアメリカ地方紙記者とのネットワークを築きながら、アメリカ人の核意識を探る企画を試みたり、西海岸、カナダ、南米にも足をのばし、広島山口などの出身者が多い日系人社会の状況をレポートすることで地方紙特派員の味を出そうと努力した。

コンピュータ時代を迎えた日本に帰国し、地方の企業、社会を含めて急激に変わる様子を経済部のポストで実感し、いま販売の現場

で多様化する読者の要望にどう応えるのか戦略を練る日々を送っている。新聞の折り込み広告の配達に郵便局が乗り出してくるご時勢でもある。いずれの業界も情報化、国際化の波に洗われている。

販売の第一線で働く若い人には、いつも三つのことをお願いしている。「まずは頑健な身体。得意なスポーツをぜひ続けなさい。次は柔軟な発想。当節はやりのしなやかな感性である。音楽良し、絵画OK、ファッションもいいね。最後は時代を読む目。これをみがかくには語学の勉強が意外に役立つよ」。考えてみると、これらの要素はいずれもコミュニケーションを図るのに欠かせない。そして、大きく変わる企業や社会を生き抜く手だてと自己主張を貫く術は、一見無駄に見える大学生活で培われているのかもしれないと思う。



講演に立つ松浦氏

日本留学生受入れの

経緯と問題点

東海大学留学生教育センター教授

柴田俊造

中曽根前総理は昭和五十八年に、二十一世紀に向けて海外からの留学生の数を現在の二万人からフランス並の十万人に増やそうという構想を打出しました。今日の日本は政治、経済のみならず学術、文化をはじめ、日常生活に至るすべての分野にわたって国際社会とのつながりが緊密なものになってきており、



講演に立つ柴田氏

特に経済の面では世界の中心的存在となってきました。そういう状況の中で留学生を増加させるといふことは先進国となった日本としては当然なことと言えるかもしれません。しかし、私達の日本がほんとうに留学生を受入れるに足る資格を有している国であるかどうかをよく考えて見なければならぬと思えます。ところで、留学とは何かということ先ず考えてみたいと思えます。留学とは、第一義的にはあくまでも留学生自身のためであり、第二義的には祖国のためであるということが言えるでしょう。そして、受入れ側としては、留学生を迎えることは、自国に対する批判者を受入れることでもあるわけです。留学生にとつて、最大の関心事は、相手国の言語、食生活、習慣をおぼえ、できるだけ相手国の文化を吸収することです。それでいて、相手国の人間になりきつてはいけなく、つまり同化と離反、依存と独立と、留学の過程には必然的にこれらの対立する原則の間の緊張が折込まれていきます。言いかえれば留学は二つの国にまたがることであり、留学生とは少なくとも、その留学期間中はいずれの国にも完全に所属しないと言う意味で社会学でいう、いわゆる境界人なのであります。その境界人との交渉をもつことは、受入れ側の日本人自身に境界人となる機会が与えられたことでもあります。つまり、留学生とは、日本の社会と文化の中にある閉鎖性や特殊性を破り、日本の

中に世界性を育てる力でもあるわけですが。明治中期から第二次世界大戦が始まるまでの五、六十一年間に来日した中国人の日本留学が失敗に終わったとすれば、それは中国人よりむしろ受入れ側の日本人が彼等の留学から学ばなかつたからだと思えます。留学とは一方的な学習でもなく、二つの道が交差する不思議な学習でも言えるわけです。今日、私達が関心を持たなければならぬものは、留学生自身が日本から学びとろうとするものよりも、すでに戦後四十数年の歴史を持つアジアの人々の留学から日本人自身が何を学びとつたかという問題だと思えます。そして、日本及び日本人としてアジアのひとびとに教えるに値するものを本当にもっているのか、留学生政策としても呼ぶものが日本にあるのか、真剣に考えなければなりません。そこで以上の問題をふまえて、(1)留学の力学(2)戦前の中国人留学と抗日運動(3)留学生から教えられるもの(4)日本人自身の学習という点について具体的に考えてみたいと思えます。

留学とは複雑な多面性をもつ人的交流であります。そこで、まず、留学の力学について考えてみたいと思えます。日本のアジア人留学生の受入れという具体的な問題をとりあげると、三つの段階を考える必要があると思えます。(1)教育とは何か(2)その特殊な形態である留学とは何か(3)新興地域の人々の日本留学とは何かということですが、そもそも教育とは何であるのでしょうか。優れた教師とは、反面教師であると言われるように、一つの国の中でも優れた教育には教える者と学習する者との間に対立した緊張を含む力学があります。教師を批判し、背き、これを越える学生がいる場合、教師は彼から深く学ぶことができます。それこそが優れた教育なので

す。かりに、教師の学説に同調するだけの学生を育てたとしたら、それは教育の失敗だと言ってもいいでしょう。教育とは人間の中にあるものを引き出すことにあるとするにしろえからの考えは正しいと思えます。別の言葉に置きかえると、教師自身が学習する者から学びとる交流が成立したとき、はじめて真の意味の教育が行われるわけです。教育の力学に含まれるこの交流の緊張は、留学という特殊な学習形態の場合、極めて鋭い形をとり、文化に属しています。そればかりではなく、通常、教える者の属する国は、経済的に富んでおり、政治的にも優位を占めています。学ぶ者は自国の政治的、経済的な劣勢を強く意識します。それは当然であるばかりか、これを意識する学生こそ、独立を望む優れた人間だといえます。

明治二十七年、二十八年の日清戦争の直後、清国政府は、日本に多数の留学生を送っています。日清戦争に至るまで、中国人からみれば日本は極東の小国であり、日本が中国から学ぶことはあつても、中国が日本から学ぶこととはないと考えられていました。日清戦争による敗北は中国にとつて非常なショックであり、それだけに新しい目で日本を見、近代化に成功したかに見える日本から学ぶことに心を抱いたのです。しかし、学びに来た日本で、中国人留学生たちは屈辱的体験を重ねました。そういう日本の中にも、中国人留学生を理解し、その教育に努力した者もいました。なかでも当時、東京高等師範学校の校長であった嘉納治五郎は、学校以外に特別に塾を設け、そこで中国人の教育に当りました。このようなケースは例外であつて、日本の大勢は全くこれに反するものでした。日本に留学し、

帰国した留学生の中から多数の抗日指導者が生まれた理由は次の三点に要約することができ、第一に、当時の日本政府の中国政策は留学生の考えと正面から対立するものでした。学生は清国政府を転覆し、国民党による革命成就を願っていましたが、日本政府は清国政府との関係の維持に心を配っていたからです。第二に、中国人学生が不満に思ったのは、日本政府の政策以外に、日常で接する日本人の態度だったということです。下宿、街角、食堂で日本人が示した軽蔑的な態度、また、中国人排斥を描いた小説などからどんなに傷つけられたか計りしれないものがありました。第三に、学生を受入れた学校に多くの問題がありました。多くの大学は中国人のための速成課程を設け、正規のカリキュラムによらない教育を行ったため、日本の教育に対する信用を著しく失わしめました。当時、中国では、アメリカやイギリスで学んだ学生が、学力を身につけて帰国したことを高く評価しました。これに対して、日本については政府の政策、日常の生活、学校教育という三つの面のいずれについても深い不満を抱きました。結局、日本留学とは、一般に不愉快なものであり、結果において抗日、反日の意識を強くしたということになります。

このようにみますと、今後の日本を巡る人的交流について悲観的にならざるをえません。短期的に国益を拡大したり、安易な親善をはかることを求めるなら、留学生の受入れは適当な方法ではありません。留学生というのは長期的な経過を経て、結果がでるものだから。現在の日本も、過去の日本に比して体質的には大きな変化も、成長も遂げていないのではないかと恐れます。この体質のままでは人的交流を計れば多くの困難に直面することは

火を見るより明らかです。そこに必要なのは、留学という特別な学習活動についての深い理解と認識であります。安易な考え方を完全になくすことから始めなければなりません。留学生の受入れという、受入れ国が一方的に新興国の学生に教えるという考え方がありません。まず、この考えを180度転換させなければなりません。留学とは、実は異なった国に属する人間の相互交流であります。利益を受けるのは留学生だけではありません。むしろ受入れ国の人間が利益を受けるという認識が必要で、かりに、明治時代、留学生を受入れた日本に嘉納治五郎のように本当に自他共栄の考えをもって中国人留学生から学ぶ人が数多くいたとすれば、その後の日本の歩んだ道はかなり異なったものになっていたとおもいます。

日本は七世紀以来、観念のレベルではインド、中国、朝鮮などの文化を吸収し、また、一九世紀以後は西洋の文化の学習につとめてきました。この点を指摘して、日本文化を雑種文化と名付ける者がいますが、他方、島国に生きる国民として、言語、文化の上で同一性が高く、また社会関係においては閉鎖的、排他的であることは否定できません。社会主義、資本主義のいずれの体制をとる場合にも日本人として、警戒を要するのは日本人の文化と生活に潜む特有な外国人への対応であります。言いかえれば、日本人の外国文化、外国人への対応の仕方には観念と態度の二重構造がみられます。観念の上では開放的であり、外国文化の摂取に熱意を示しますが、態度は閉鎖的であり、日本人だけの社会を構成して他人を入れようとするという傾向があります。もう一つは、国の中で中央と地方、官と私の区別を設け、社会をタテの構造としてとらえ、上下の序列を設けていますが、これとほぼ同じ仕方で国際関係をとらえています。アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの国々を後進地域として低くみ、アメリカ、ヨーロッパなどを先進地域として全てを高くみて、上下の序列の中に日本を位置付けています。もっとも、こうした先進、後進という国際社会についての上下序列の単純な尺度は、今や世界中にゆきわたっていますが、この考え方が日本ではきわめて強く、しかも浸透していると言っても過言ではないと思います。日本はかつて自国の後進性を強く意識したが、ある時期がくると、これが優越意識に転化して、蔑称をもって相手を呼ぶようになりまし

た。昭和の初期には日本を世界の五大強国、あるいは、三大強国の一つにかぞえました。第二次大戦後は逆にながく自国を卑下してきましたが、最近では経済大国と言ったり、GNPが第二位であることを得意がる人々が少なくありません。以上のような性質を持っていることは留学生受入れ国としては不適合であろうと思います。この二十年、アジア地域に日本企業が進出して以来、日本人の態度に問題があるといわれてきました。私もカンボジア、インドネシア、中国に日本語教育のために長期滞在したことがありますが、そういう傾向が強く感じられ、悲しい思いをしたことがあります。以上のように留学生を受入れるという事は簡単なことではなく、日本人が国際社会の中で生きていくためには留学生に対する意識改革をしていかないと結局は過去の過ちを繰返すことになってしまいます。現在、私が勤務しております東海大学には二十七八千人、二百数十人が学んでいます。全学生三万人の中の三百人、つまり一%なので、まだ目立つ存在ではありませんが、近い将来はそ



講演者を囲み

の数は二倍、三倍と増えていくだろうと思います。これからの日本は国際社会の中で、世界の人々といっしょに仲良く生きていくよりほかに生きる道はありません。そのために、若い時から外国人と付き合い、特に東南アジアをはじめとする開発途上国の人々と付き合い、お互いの持つている価値観の相違を認め、知合うことが大切で、これがなければ過去の日本をもう一度繰返すことになってしまいます。皆さんの身近に必ずいるとおもいますから、真の意味での人間としての交流をしていただきたいと思ひます。

私の中の山大・山口

〈想い出〉

矢野 優

(哲学・倫理学・文理第10
八回・昭和四十五年卒)

ボケる年でもないのに、二十年前のことを思い出すには努力がいる。とりわけ、山口での四年間にこれといった印象を持たなかった私には、それは当然のことかも知れない。

それでも、こうしてペンを執っていると、十カ月間の鳳陽寮での生活、下宿してからの限られた友たちとの付き合い、そして大学紛争と、あれこれと思いつくふから不思議である。鳳陽寮では、入寮の日、朝まだ暗い山口の駅に降り立ち、凜とした冷気の中を布団袋を肩に寮まで歩き、まだ寝静まっている寮の半分壊れかけたような玄関先で、三時間近く待たねばならなかったことが思い出される。また、夏には椹野の川原でビールを傾けて人生を語り、冬には銭湯の帰りのオデン屋でコップ酒を飲みながら恋を語った友の顔が目につく。そして大学紛争。哲学科の研究室には、さまざまな考えの人たちがいて、人間的興味は尽きなかったけれど、渦中の出来事については余り議論することもなく、〈行動〉という言葉だけが空回りしていたような、そんな気がしてならなかったことを覚えている。そうした落ち着かない雰囲気の中で、武宮先生のお宅に招かれて、暖かい鍋をつつきながら受けた講義や、先生と二人で喫茶店で読んだ『弁明』の難しかったけれど、旋律を持った綺麗なギリシア語が彷彿とする。—— 妙

に遠くに霞んでしまったような想い出の中に、それでも自分が学生であったことを思い出させる記憶の断片が、心の壁に張り付いていたことに気が付いて、戸惑いとともに、悔恨にも似た思いが湧いてくるのを禁じることができない。

五年ほど前の夏、短い時間だったけれど、山口の街を訪れる機会を得た。僅かな時間を惜しんで、宮野から平川まで車を走らせてみただけれど、二十年の歳月ばかりが重くのしかかってくるようで、息苦しくて、山口を後にしたことがあった。想い出とはそうしたものであろう。時と人が山川と一つになつて、想い出をかたち造る。時が流れ、人が移ろつたあとの山川は、妙に白っぽく感じられて、いいような淋しさを与えるのかも知れないか。そして、それはそれでいいのではなかろうか。時計の針を巻き戻すことが出来ないように、人も山川も呼び戻すことは出来ない。たとえそれが出来たとしても、私には、今、ここに座っている自分を過去へと連れ戻すことは、もう出来ないだろうと思う。想い出は、遠い昔の人々や山川を昔のままに呼び戻し、過去の自分と対話することが出来るだけで、十分ではないかと思うのである。

—— 山口の空は遠く遥かだけれど、また、いつも私のそばにあるような気がする。七階にある社会科学研究室の窓から、急に紅葉の始まった大阪城の木々やぼんやりと霞んだ生駒の山々を眺めながら、ふと、そんなことを思っている。

その後の私

成富 朝子

(社会人類学・人文第六回・昭和62年卒)

私は今、銀座のスタジオに通い、そこでコマージュの写真撮影のアシスタント(以下⑦と略す)をしている。といつても皆さんには、私がいかにどういふことをしているか、想像しにくいことだらうと思う。コマージュというところ、時代の先端をゆくような目新しさ、華やかさ、派手さを思い浮かべがちだが、こと⑦というものは、おおよそそんなものとは無縁だ。(特にうちのスタジオは商品撮影《物どり》が主でモデル撮影などはあまり多くないので余計そういえるのかもしれない)仕事の内容は長くやるので書かないが、とにかく朝から晩までやることは多い。撮影に関することだけやるのなら、時間は長くとも普通の会社のお勤めと同じだが、一旦スタジオに足を踏み入れた時から(いやカメラマン(以下⑧と略す)と一緒に外に出た時)お疲れ様でしたといつて帰るときまで緊張の連続である。そこはそれ、昔から脈々と生きづいてきたであろう、⑦の丁稚奉公的な特質である。そんなことは、ここにくる前から十分覚悟していたつもりだったが、大学を出てすぐこの世界に飛び込んだ私にはどうしても体に合わない所がある。⑦は本当に朝早くから夜遅くまでこき使われるので、疲れもするし不満もたまる。しかしそれをがまんして⑧になりさえすればこんな生活から解放される。こういう図式だ。それで⑦はなんとかはやく⑧に

とあせるし、並大抵でない努力も出来るのだ。しかし⑦時代にこんな経験ばかりだと、私なんかは、自分の感性がひねくれたものに変わってしまはいはしないかしらなどと不安になってしまふ。②に必要な⑦には必要でない自由な発想が。であるから私は、悲惨さとかハングリー精神が光りものである⑦の体質に染まるように努力していると見せかけながら心の底では私は絶対あはなるまいと思っている。(この文章がうちの⑧の目にふれないことを心から祈る。)

「へえ〜」「おやまあ」
のアメリカ暮し

中村 裕 美

(英語学・英米文学・文理
第二十三回・昭和五十年卒)

このたび、夫に伴つての三年に亘る米国生活を終えて帰国した。U.S.A.と言えば広大な国であるし、住んでいた所が米国内でも特殊なワシントンD.C.という政治的国際都市の郊外であったから、この記事をもって「アメリカは:」という捉え方だけは決してして貰いたくないのだが、以下は私がほんの少々経験したうちのいくつかである。

駐在二年目に両親を呼び寄せた。空港からわが家への道すがら「今の時速は？」「百キロ位」「これ有料道路？」「全米大部分の道はタダ」というやりとりの後、彼らはいみじくも言ったものだった。「こんな国と戦争して勝てるわけはなかったよ」この台詞は滞在中の彼らの口癖となってしまったのだが、百聞は一見にしかず、われわれにしても、あつと言期間の三年間ながら、単なる旅行ではわからない所を、良くも悪くも見せてもらったと思う。これだけ情報過多の時代でも、知っているようで知らなかったんだなあ、というのが今振り返つての実感である。

アメリカ行きが決つた時、周囲の者が心配したのは、やはり「危ない」ということだった。三週間のホテル滞在中、OKとは言われても、最初は地下鉄に乗るのが恐ろしくて、二才の息子をベビーカーに乗せては、暑い中を三十分かけて博物館へ日参したものであった。ある日見ると、若い女性がひとりで昼間の閑散とした地下鉄構内へ入っていく。あれ、本当に大丈夫みたい」とその時思ったことである。そして二年目には、毎週一度はノンラッシュ料金(ラッシュ時の3割)の地下鉄で夕方まで口の見物としゃれこむようになった。尤も私が歩き回るのは観光区域のみで、D.C.全体については意外にも殺人率全米一位とかアメリカの街は、殆どがそうだと思うが、危険地区があつて、そこには決して足を踏み入れるべきではない。板子一枚じゃない「街路一本向うは地獄」で、何があつてもそれは自分の責任である。

という嘘のような本当の話もある。さて、外米と言うとまずい物と連想される年代もあるかと思うが、内地米の神話はとつと崩れ去つていく。日本からの客を迎える「米がおいしくないでしよう」と、さも同情するように言われる。が、その御仁が「こで勝手に感激しているその米こそ、25パウンド(11kg強)が税込みわずか10ドル弱のカルフォルニア米なのである。帰国の際に人数枠いっばい米を買いこんで行つた家族もいれば、「この旨くて安い米は、米国内の者にのみ許されるべきもの、日本向け輸出反対」の声だつてあるのだ。瑞穂の国つて米国のこと？

個人主義の国だから、お互い余計な干渉は関心とは違う。知らない同士でも挨拶や立ち話をし、留守をする時は、お隣さんの方から郵便物を預かるうと言つてくれる。最も驚きかつ感激したのは、11年ぶりという豪雪の中を旅行から戻つた時のこと。ドライブウェイと玄関までの通路(約30m)が全てきれいに除雪されていたのである。たまたま特上の隣人に恵まれたおかげではあるが、自分にはとても真似できることではなく、ただただ頭の下の思いであつた。

農耕定住型のわれわれとしては、狩猟遊牧型の彼らとの違いに改めて愕然としてしまうのである。そして私自身はと言え、夫が鶴の真似をする鴉にならぬよう、目を光らせておこなくつちやと思つてゐる所なのである。

思い出の地山口

田中三生

(言語学・人文・第二回・昭和五十八年卒)

山口の地を離れ、すでに六年近くが過ぎ去ろうとしている。毎年五月の連休には、大学の時代の友を訪ねて山口に立ち寄るのだが、四年間下宿した長屋は懐かしい姿を留めていたが、裏の畑はすでに埋め立てられ、後輩たちのアパートとなり、もう姫山を望むことができなくなつてしまつていた。やはり心淋しい思いがする。

今、当時のことを思い返そうとすると、断片的にしか記憶が蘇らず、過ぎ去つた歳月を感じずにはおれない。ハードな演習で培われた知識やフランス語・ドイツ語などの知識そのものは錆付いてしまつたが、つらい徹夜の子習をした苦労の方が今では懐かしい限りである。この四年間で得たものは自分の人生にとつて計り知れないものがある。山口時代に培われた人間関係もそうである。山口を去り二年間東京で英語教育の研究を行つていたが、山口での生活に比べて、生活自体がつまらないものだった。しかし、山口時代に親交を深めた友が東京に来てくれたので心強い限りであつた。

スがあり、自分は一年英語コースの担任をしている。生徒の学力は決して高いと言えないのだが、音声学の知識や言葉に関する雑学的な知識は生徒の興味をひくのに役立っている。自分の学生時代を振り返り、在学中の後輩諸君には、何かひとつ自分で自信をもてるものを身につけて巣立つてほしいと思う。友情ももちろんである。二度と来ない青春を謳歌してほしい。

最後に、在学中にお世話になりました柏木英彦先生・平野尊識先生に心より感謝申し上げます。又、同窓生の皆様のご健康と益々のご発展をお祈り致します。

すばらしい思い出を残してくれた、第二の故郷の山口よ、しばしばようなら。

(福岡県立早良高校教諭)

いま山大・山口は

美学・美術史研究室

美学・美術史学科は学部改組によって新しくできた学科で、まだ十年足らずの歴史しかありません。初めの頃は無からの出発で、図書はないし、学生のレベルもよく分らないしということ、教師も学生も大分まごつきましたが、近頃はすつかり落ち着いて、和気藹藹の雰囲気になりました。あんまり落ち着きすぎて、や、イージー・ゴイングの気味があつた程です。これも時代なのでしょう。時代と言え、現代は美が生活の中心に置かれるほど、重要な役割を占めるようになってきていくように思います。もつとも、その割に美の質が浅薄になつてしまつていくという気も

昭 和 62 年 度 事 業 報 告

62. 5. 11 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (和田会長出席)

6. 13 第8回役員会

12. 21 「鴻文会会報第7号」発行

昭 和 62 年 度 収 支 決 算 書

収 入 の 部

科 目	当初予算額	決 算 額	比較増減	摘 要
繰 越 金	5,668,151円	5,668,151円	0円	前年度より繰越金
会 費 収 入	1,200,000	1,790,050	590,050	5,000円×358+50円 (昨年度分)
名簿売上収入	0	1,000	1,000	1985年版1冊
雑 収 入	200,000	147,846	△ 52,154	証券、預金利子ほか
合 計	7,068,151	7,607,047	538,896	

支 出 の 部

科 目	当初予算額	決 算 額	比較増減	摘 要
会 議 費	40,000円	18,040円	21,960円	役員会(62.6.13)18,040円(車代15,000+茶菓子3,040)
印 刷 費	140,000	123,000	17,000	会報印刷作成費(2,900部) 123,000円
郵 送 費	160,000	151,600	8,310	役員会案内葉書 1,600円 会報郵送料 140,040円 (60円×2,334) 切手 9,960円 (60円×166)
寄 付 金 費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝 金 費	70,000	63,000	7,000	会報発送宛名書きアルバイト38,000円、幹事用謝金 25,000円
雑 費	20,000	3,025	16,975	フィルム代、DPE代 2,715円 のり代 310円
予 備 費	6,538,151	0	6,538,151	
次年度へ繰越金		7,148,382		
合 計	7,068,151	7,607,047		

昭和63年5月7日監査の結果過誤なく適確に経理されていることを確認します。

監 事 森 田 良 吉 印



たような感じですが。(石原達二教授)

学生諸君の卒業後の進路は、公務員とか一般の民間企業へ行く者が大部分ですが、専門を活かして美術館の学芸員になったり、また進学する人もいます。その進学ですが、昭和六十年から大学院が新設されて、我が学科もすでに四名の卒業生を出しています。ただ就職口が厳しく、悩みの種です。

教師は美学を担当する石原と、美術史の奥津助教授の二名です。石原は美学思想史と近代芸術を主に研究していますが、生来好奇心が旺盛で、なんにでも首を突込みたがる癖があります。奥津助教授はミケランジェロなど近世美術を中心に研究していますが、最近はとみに現代美術づいてるようです。二人とも芸術家になり損なって学者になってしまったような感じです。

美学・美術史学科に集う学生諸君は、やはりなんらか特定の芸術や芸術家にとくに興味を抱いている人が多いようです。各人が自由に関心のある問題に取り組みよう指導しているの、みんな色々なことを勉強しています。なかには、あまり特殊で教師もお手上げのようなことを研究する人もいます。それはまあよいのですが、なにをやっても美の基本問題をなおざりにしてもらいたくないと思っています。

昭和 63 年度 事業 計画

- 1、第9回役員会 (5月7日)
- 2、山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会 (5月19日)
- 3、人文学部10周年記念事業
記念講演会 (5月28日) 記念植樹 (10月)
- 4、「鴻文会会報第8号」発行 (12月)
- 5、その他

昭和 63 年度 予算

収 入 の 部

科 目	63年度予算額	62年度予算額	比較増減	摘 要
繰越金	7,148,382円	5,668,151円	1,480,231円	
会費収入	1,200,000	1,200,000	0	新入生 5,000円×190、卒業生 5,000円×50
雑収入	200,000	200,000	0	証券、預金利子ほか
合計	8,548,382	7,068,151	1,480,231	

支 出 の 部

科 目	63年度予算額	62年度予算額	比較増減	摘 要
会議費	40,000円	40,000円	0円	役員会40,000円 (車代等含む)
記念事業費	600,000	0	600,000	10周年記念事業 600,000円 (記念講演会 250,000+記念植樹 350,000)
印刷費	150,000	140,000	10,000	会報印刷作成費(3,000部) 150,000円、
郵送費	280,000	160,000	120,000	役員会用葉書 2,000円 10周年記念案内 108,000円 (40円×2,700) 会報郵送料 162,000円 (60円×2,700) 通信連絡費 8,000円
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝金費	110,000	70,000	40,000	10周年記念案内アルバイト 40,000円 会報用アルバイト 45,000円 幹事用等謝金 25,000円
雑費	20,000	20,000	0	文具類等
予備費	7,248,382	6,538,151	810,231	
合計	8,548,382	7,068,151		

外国人にとっての日本語

張 淑 玲

わたしたち外国人の見方で日本語の特徴と考えられるものひとつに、敬語の使い方がある。たとえば、わたしたち中国人にとっても決して一様ではない。日本語を使う場合は、言語そのものの構造の差は言うに及ばず、地域の差、職業による差、年齢差など、個人差のレベルにまで配慮しなければ使えない。日本人の言語行動を観察した私の体験を紹介してみる。

例えば、中国語で「我来介绍一下」と言う場合に目上の人に対しても、目下の人に対しても同じように使える。一方、日本語の場合はいくつの言い方があるであろうか。「ご紹介させていただきます」「ご紹介いたします」「ご紹介いたします」「ご紹介いたします」など、数えきれないほどの言い方があるような気がする。それぞれのことばも人に与えるイメージが違ってくるであろう。日本の社会は本当に縦の社会だなぁとつくづく感じさせられた。この縦社会の中で使っている敬語はわたしたち外国人にとっては大変難しい問題である。こうしたことばの複雑な構造が、外国人にとって日本に入りこめなくしていると思っ

張淑玲先生は、山東大学外文系の講師で、昭和六十三年度日・中学術交流会基金により、一年間の予定で、山口大学人文学部に学んでおられます。専門は日本語教育。山口大学では、「言語行動における日中の比較」の課題で研究中です。日本語研究のご経験から、日本社会に対する感想を寄せていただきました。

昭和六十二年
人文学部進路状況

学科 進路先	人文学科		語学文科学科		合計
	男	女	男	女	
卒業生数	52	49	18(9月卒1名)	59	178(1)
就職者数	29	40	13(1)	50	132(1)
進学者数	12	1	1		14
聴講生・研究生	1		1	1	3
その他	10	8	3	8	29
計	52	49	18(1)	59	178(1)

人文学部卒業生、大学院人文学部研究科
修了生の進路内訳

人文学科
 哲学・倫理学
 櫻山(株)、(株)大信販、九州大学大学院文学研究科、九州大学大学院文学研究科、山口大学大学院人文学部研究科、(株)中央出版
 日本思想史学
 (株)富士通中国システムエンジニアリング、
 広島大学大学院文学研究科、大阪大学大学院文学研究科、(株)サンデーサン
 美学・美術史

鶴丸航空観光(株)、西部ガス情報システム(株)、直方市役所、(株)京樽、長崎オランダ村(株)、(株)フタバ図書、福岡県労働部職業安定課、日本メジフジックス(株)、ブックバーン(株)、岩尾磁器工業(株)、リクルート映像、竜谷大学大学院文学研究科、(株)ウテナ
 国史学
 北九州グライハツ販売(株)、(株)丸久、(株)西日本新聞社、美祿市役所、和田中学校、(株)ノエビア、福岡ゼロックス販売(株)、近畿日本ツリースト(株)、広島県立吉田高校(講師)、徳山商業高校(講師)、(株)東洋シート、山口県計量協会
 東洋史学
 小野田工業高等学校、マツダ(株)、(財団法人)公営事業電子計算センター、山口大学大学院人文学部研究科、徳山市秋月中学校(社会科)、山口大学大学院人文学部研究科、山口大学大学院人文学部研究科
 西洋史学
 柳井商業高等学校、(株)宮崎交通、徳山海陸運送(株)、日本生命保険相互会社、山口市役所、日本電信電話(株)、(株)モーツアルト、宇部市役所、(株)井筒屋、広島大学大学院文学研究科
 考古学
 (株)ぎょうせい、聴講生(理学部)、(株)産報通信社
 社会学・社会心理学
 福岡リコー(株)、(株)船場、テレビ山口(株)、泉大津市役所、山口大学大学院人文学部研究科、東拓工業(株)、(株)日本交通公社、(株)ベスト電器、(株)タウン情報ひろしま、日本電気通信システム(株)、NHK(臨時)、住友海上火災保険(株)、日本タイムシェア(株)、(株)広島相互銀行、広島地方裁判所、永田法律事務所

務所、中国日本電気ソフトウェア(株)、(株)産報通信社、西日本ソフトウェア(株)、山口県庁(臨時)、西日本オプティメーション(株)、久留米市役所、福岡市役所、岸学習塾
 社会人類学
 (株)ヤマハ、十和(株)、戸畑高校(非常勤)、福岡県農業協同組合中央会、福岡銀行(株)、(株)井筒屋、山口大学大学院人文学部研究科
 語学文科学科
 国語学
 (株)天満屋、コスモ証券(株)、東京証券(株)、(株)岡山社、(株)教育文化社、岩国高等学校、日本電信電話(株)、(株)日本ビジネスコンサルタント、(株)鴻池組
 国文学
 山口県庁、南陽工業高等学校、美祿工業高等学校、(株)中国計算センター、福岡ジャスコ(株)、富士ゼロックス(株)、日本生命保険相互会社、(株)寿屋、海星高等学校
 中国語学・中国文学
 光ヶ丘高等学校、(株)山口銀行、山一証券(株)マルシヨクグループ本部、(株)鈴屋、(株)天満屋、産興(株)、(株)シャロンコーポレイション
 英語学
 コスモ証券(株)、八幡証券(株)、(株)日本ビジネスコンサルタント、(株)タカキュー、柳井工業高等学校、河合塾(福岡校)、東愛知リコー(株)、光高等学校、井原精研高等学校、(株)日本交通公社、山口鴻城高等学校、別府羽室台高校
 英米文学
 KK中央出版社(北九州支社)、(株)ワールド、大分雄城台高校、柳井市役所、口加高等学校、防府西高等学校、山口県庁、熊毛南高等学校(上関分校)、(株)リクルート、広瀬高等学校

ドイツ語学・ドイツ文学
 宇久高等学校、山口県庁
 フランス語学・フランス文学
 日立リース(株)、ひろぎんシステムサービス(株)、(株)原家具、光市和床中学校、(株)日本エール・シーエー、中国JBA(株)、久賀高等学校、カホ無線(株)、九州日本電気ソフトウェア(株)
 言語学
 研究生、山口大学大学院人文学部研究科、(株)長府製作所、第一證券(株)、日本新葉(株)、キャセイ航空、第一證券(株)、防長トラベルサービス、鶴崎高等学校
大学院人文学部研究科
 九州大学大学院文学研究科(修)、ふくやま美術振興財団、(株)新東通信、宇部工業高等学校、福岡県古賀町文化財、ポーランド州立大学大学院、広島大学大学院文学研究科(博)

会員消息
 ○国史学・文理第三回卒業生の和田嘉郎氏は、昭和61年3月、「阿部正弘公」とその著者雨齋福田禄太郎先生伝」を刊行。「阿部家系図」を附す。出版は福山市の内外印刷。
 ○国文学・文理第八回卒業生の西村敏通氏は、短編集「いざごぞ青空」を近代文藝社より昭和63年4月に刊行。表題の「いざごぞ青空」他全8篇を収める。山口国文12号に森下辰衛氏の「紹介」が予定されている。
 ○国文学・文理第十七回卒業生の添田建治郎氏は、昭和63年5月に、共著「新しい国語学」(朝倉書店)を出版。第六章「方言」を担当執筆。

山口点描

我々が青春の一時期を過ごした思い出深い山口の街のいまをペンとカメラで紹介するシリーズ。今回は40年代後半からの卒業生に懐かしい「平川の大杉」をクローズアップしてみる。後河原から昭和42年秋に平川の地に移つて、足を運ぶことの多くなつたのが、この「平川の大杉」であろう。大学キャンパスから約2キロ南、平川中河内の奥も奥人里離れた所に、幾分かこんもりとした一画が眺められる。知る人ぞ知る、平川の大杉である。周囲の風景は、40年代とはかなり様変わりして住宅が目立つようになり、大杉へ通う道も舗装されている。まわりの木々も幾度となく植林と伐採を繰り返したようだが、大杉のみ変らぬ姿を今に留めている。目通り周囲八・五メートル樹高約三十五メートルの古木である。大杉に寄り添うと、人の世がすべてでないことに気付く。空から見た蟻のような人の往来、無限の宇宙からみた小さな地球。我が身のちっぽけな存在を眺めたときのこの不思議なやすらぎはどうしたことか。幾人の人が生まれ倒れていったことか。十五年ぶりに足を向けて思うのは、「何をあくせくしてきたのか」ということ。昨年瀬戸内を旅することがあった。香川県詫間町の小島志志島。人口が流出して、お会いした50才後半の男性が何と最年少とのこと。草花の栽培と漁業で生計を立てるこの島に楠の巨木をみた。種が落ちて枝の上に乗って小木が育つほどのその様は壯観であった。潮風を吸いきらきら輝く瀬戸内を見下ろす楠も一見の価値あり。平川の大杉に別れて大学に戻るとき、東、西の鳳凰山がシルエツトになって横たわっていた。

各研究室同窓会紹介

- 中国哲学
 - 昭和六十三年二月二十一日
 - ホテルニュータナカ弥生の間 四十名
 - 内山俊彦先生の京都大学への転任を歓迎しまたこれに機をかりて中国哲学研究室同窓会を結成、初代会長に本学教育学部の大塚博久先生を選出した。
- 社会学(社会心理学含む)
 - 昭和六十三年六月二十五日
 - 大阪国際交流センター 約四十名
 - 社会学同窓会は、すでに東京・広島・福岡などに支部ができています。本年は、大阪支部の結成をかねて大阪で年次総会および懇親会を開催した。山口からは、竹田会長(宇部西高校校長)のほか、木下、小川、ウオンの各教官が出席した。すでに退職された近沢敬一先生、大本晋龍先生も出席されて盛会だった。
- 国語学国文学
 - 昭和六十三年二月二十一日
 - とじま湯田店 二十五名と教官一名。
 - 昭和六十三年八月二十六日
 - いこい食堂にて人文第三回卒業生の同窓会。三十一(二世)名と教官二名。卒業生のかかりが大集合して大いに盛り上がった。
- 英語学・英米文学
 - 昭和六十三年七月三十日
 - 人文第二回卒業生中心の会 かも福(湯田)、十四名
- 第八回「イギリス会」例会
 - 昭和六十三年十一月十九日(土)
 - 山口県婦人教育文化会館(湯田) 十八名

故田中美輝夫先生の呼びかけで、昭和五十一年秋に発足、英米の地を踏んだ卒業生有志が、情報交換と親睦のために集まるミニ同窓会。自由参加歓迎です。

人文学部研究雑誌紹介①

山口大学人文学部国語国文学会は、国語学国文学研究部の教官・卒業生・在学生を会員として昭和51(一九七六)年に発足した。現在、研究発表会と研究懇話会とともに年一回行っている。その学会の研究誌として発行されているのが「山口国文」である。昭和53年に創刊号を刊行、今年で11号になった。国語教育関係の論文も載せている。新しい卒業生や早い時期の卒業生の発表など、会員の熱意を支えられて順調な歩みが続けている。

◇通信・お願い◇

★昭和64年度には、第三回鴻文会総会を開催する予定です。日時、企画など肝腎な点はまだこれから具体化していかねばなりません。盛大な会となりますよう、お知恵をお貸し下さい。

★同窓会名簿第三冊目も総会開催にあわせて作成するようになっておりますので、64年度に発行の予定です。

◆編集後記◆

○「会報」第八号は「人文学部創立十周年記念」特集号のような観を呈しています。久しぶりに10ページだてでお送りいたします。記事が特定の研究室、年代に偏らぬよう、幹事の情報のアンテナを高くお考え下さいますが、色々とお気付きの点をお教え下さい。

○松浦、柴田両氏には講演にとどまらず要旨まで御寄稿いただき、大変な御負担をおかけ致しました。

○会員の皆さまからの便り、総会後の9号の会報では復活させたい企画です。

○人文学部では、図書館史などの授業を開講して、自前で図書館司書の資格が取れるようになりました。

○人文学部正面に植栽したクスノキが、支柱がとれ学部の発展とともに大きく伸びゆくようにと念じています。(S)

転居先不明の方々について、ご存じのむきは、幹事まで御一報下さい。

会費未納の方のみ振替用紙を同封致しております、なにとぞお納め下さいますようお願いいたします。

終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座
下関〇一五九〇二
加入者名 鴻文会